

第二期教育振興基本計画

◆2013年6月に閣議決定

今、正に我が国に求められているもの
それは

『**自立・協働・創造**に向けた
一人一人の**主体的な学び**』である。

**深刻な諸課題を抱え
危機的な状況の我が国**

**産業空洞化
生産年齢人口減少**

**東日本大震災の発生は、
この状況を一層顕在化・加速化**

第2期教育振興基本計画

**これらの危機を乗り越え、
持続可能な社会を実現するための
一律の正解は存在しない。**

第2期教育振興基本計画

自立・協働・創造

第2期教育振興基本計画

自立

多様な個性・能力に応じて、
生き抜くために必要な力を
主体的に身につけ、
活かすことができるようにする

第2期教育振興基本計画

協働

様々な個性を持つ人々やその集団が
相互に学び合い、支え合い、高め合い、
新たなアイデアを生み出す

第2期教育振興基本計画

創造

多様な価値観を受容し
それらがぶつかり融合する中で
新たな付加価値を創出する

第2期教育振興基本計画

新たな未来を築くための 大学教育の質的転換に向けてより

答えのない問題に対して自ら解を見出していく
主体的学修の方法や、

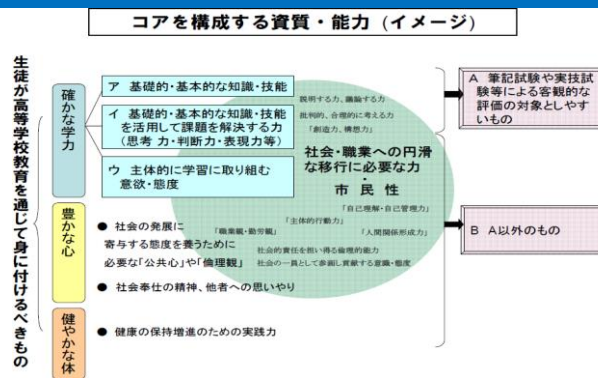
想定外の困難に際して的確な判断力を発揮できるための
教養、知識、経験を総合的に獲得することのできる
教育方法を開発し、

実践していくことが必要である。

初等教育、中等教育、高等教育それぞれの
発達段階や教育段階において
有効な知的活動や体験活動は何かという発想に基づき、
それぞれの学校段階のプログラムを構築するとともに、
教育方法を質的に転換することが求められている。

初等教育から高等教育にいたるまで、
21世紀を生きることになる児童・生徒・学生に
っては、
主体性をもって学ぶ力を自ら身に付けていく
ことが重要であり、
答えのない問題に対して、
協働で解決していく力が育つ教育でなければ
ならない。

初等中等教育分科会高等学校教育部会 審議まとめ 201403



中央教育審議会高大接続特別部会 審議経過報告 20140325

- ### 2 高大接続・大学入学者選抜の改善についての基本的な考え方
- 高等学校から大学までを通じて、主体的に学び考える力等、これからの時代に必要とされる力を育成することが重要
 - このため、高等学校教育、大学教育とその接点である大学入学者選抜との一体的な改革が必要
 - ・高等学校教育の質の確保・向上
 - ・大学教育
 - ・能力・意
- 「達成度テスト(発展レベル)(仮称)」
- ◆目的
 - 「達成度テスト(基礎レベル)(仮称)」の構想(高等学校段階における基礎的な学習の達成度の把握等)を踏まえ、これからの大学教育を受けるために必要な「主体的に学び考える力」等の能力を測ることを主たる目的とする
 - ◆対象者
 - 大学入学者志願者を主たる対象とするが、大学で学ぶ力を自ら確認したい者の受験を可能にする方向で検討
 - ◆内容
 - 知識・技能に加え、知識・技能の活用力(思考力、判断力、表現力等)や高校生活全般を通じて育成される汎用的能力等の測定を重視
 - 活用力や汎用的能力等を測定する観点から「合教科・科目型」や「総合型」の導入に向けて専門的に検討
 - 「教科型」の出題については、「達成度テスト(基礎レベル)(仮称)」との関係や教科・科目数等を提案しつつ検討
 - ◆実施方法

中央教育審議会高大接続特別部会 審議経過報告 20140325

- 「達成度テスト(発展レベル)(仮称)」の内容
- 知識・技能に加え、知識・技能の活用力(思考力、判断力、表現力等)や高校生活全般を通じて育成される汎用的能力等の測定を重視
 - 活用力や汎用的能力等を測定する観点から「合教科・科目型」や「総合型」の導入に向けて専門的に検討
 - 「教科型」の出題については、「達成度テスト(基礎レベル)(仮称)」との関係や教科・科目数等を提案しつつ検討

**育成すべき能力が
変わってきた**

**正解のない課題にこそ
ICT活用の意義がある**

正解を教えない教育の実現

**ICTを活用して
協働で創りだす**

「学びのイノベーション事業」の成果

3 ICTを活用した指導方法の開発
(学習場面ごとのICT活用を類型化し、そのポイント及び実践事例を掲載)

A 一斉学習	B 個別学習	C 協働学習
<p>教科や実習を拡大・縮小・変換への書き込み等を利用して、分科や単元を融合することにより、学習者の興味・関心を高めることが可能となる。</p> <p>A1 教員による教材の提示 最後の拡大表示や書き込み、音声、動画などの活用</p> <p>B1 個人に合わせた学習 一人一人の習熟の程度等に応じた学習</p> <p>B2 調査活動 インタビューを用いた情報収集、写真や動画等による記録</p> <p>B3 思考を深める学習 シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習</p> <p>B4 表現・制作 マルチメディアを用いた資料、作品の制作</p> <p>B5 家庭学習 情報端末の持ち帰りによる家庭学習</p> <p>C1 発表や話し合い グループが学年全体での発表・話し合い</p> <p>C2 協働での意見整理 複数の意見・考えを整理して整理</p> <p>C3 協働制作 グループでの分担、協働による作品の制作</p> <p>C4 学校の壁を越えた学習 遠隔地や海外の学校等との交流授業</p>	<p>デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く関心することや、自分に合った速度で学習することが容易となる。また、一人一人の学習進度を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学習を構築することが可能となる。</p>	<p>タブレットや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流学習において子供同士による意見交換、発表などお互いを高めあふ学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。</p>

文部科学省「学びのイノベーション事業実践研究報告書（概要）」（2014.04.11）より

**これらの新たな学びを
すべての児童生徒に！**

**佐賀県が
新たな幕を開けてくださった。**

新たな学び

**育てたい力が異なるなら
学び方を変えよう**

東原義訓(ひがしばら よしのり)

信州大学学術研究院教育学系 教授
信州大学e-Learningセンター副センター長
教育学部附属教育実践総合センター長

2014年7月7日